

六つの現代イタリア短編小説

橋本勝雄

始めに

久しぶりにCDショップに行ってみて、試聴システムの進歩に驚いた。店内のCDのうちかなりの曲が簡単に試聴できる。音楽データのデジタル化を考えれば当然だが、かつてに比べて格段に試聴しやすくなった。

再生システムの必要なCDとは逆に、小説の場合、物理的アクセスは比較的容易といえる。店頭でブルーストの長編小説を立ち読みする強者もいるかもしれない。ただ、買うつもりならわざわざ店頭で読む必要はないのだから、「買わずに読み切る」立ち読みは、試読とは別の行為とみなすべきだろう。試し読みの目的が、不慣れなジャンル、見知らぬ作者、未知の作品を購入するかどうかを判断することにあるとすれば、小説は音楽よ

り「ソフト」的に難しいように思える。作品を読む時間は、音楽とは比較にならないほど長いし、その部分から全体を類推することもずつと複雑だ。それだけ、実際にその場で「拾い読み」した作品の一部よりも、裏表紙や腰巻きの寸評、新聞書評などの影響がより強く働く。外国語小説ならなおさらだ。むしろ文学の場合、複数の作家を集めたアンソロジーを、一種の「試聴」版とみなすことができる。国、ジャンル、傾向、年代などのいくつかのフィルターと、解題・解説によって、部分から全体を類推する、つまり一部の作品から作家全体を想像することが手助けされる。そうしたなかから、気に入った作品、印象に残った作家を探せばいい。

イタリア二〇世紀の短編小説に限っても、さまざまなアンソロジーがある。一九〇〇年と二〇〇〇年にそれぞれ四十才以上

という年代的基準により三〇八名の作家の短編を収めたエンツォ・シチリアーノ編『二十世紀イタリア短篇集』は、三巻本の圧倒的量からしてイタリア文壇全体を網羅した総覧という印象がある。幻想小説というジャンルによるアンソロジーとしては、パラッツェスキ、ランドルフィ、ボンテンペリなど幻想作家を集めたジャンフランコ・コンティーニ編『魔法のイタリア』が有名だ。八〇年代以降の「若い小説」ブームを背景に、いくつものアンソロジーや雑誌が出された。たとえばアンソロジー『ジョヴェントウ・カンニバレ(残酷な若者)』が、過激な暴力描写を好んで描く「バルブ」ブームの火付け役となったように、新しいトレンドや運動を打ち出す狙いもあるだろう⁴。

フィリップポ・ラ・ポルタ編『現代イタリア短篇集』は、現代の古典と新人作家たちの間に位置する多くの現役作家を広く集めており、手頃な「試聴版」と呼ぶにふさわしい。新聞や雑誌で現代小説評を担当するラ・ポルタの評論家としての視野の広さは、一九九五年の評論集『新しいイタリア小説』で扱われている作家の多様性によく現れているが、このアンソロジーでは、現代における短編小説の人氣を考察した巻頭解説、個々の作家・作品に関するコメント、さらに作品内の語注までが付されている点など、若い読者を対象にした様々な教育的配慮がうかがえる。最年長一九三七年生まれのチェラーティから一九六九年生まれのバツレストラまで、複数の世代の作家十八人の

作品が五つのテーマに分類されている。複数の年代やテーマにまたがる選択と構成によって、混沌として見えにくい現代文学を整理することに成功している。そこから六つの短編を訳出し、イタリア現代小説を「試聴」してみたい。

1 世代

八〇年代小説の再興のきっかけとなったモティーフとして、世代意識、異なる世代間の対話が挙げられる。語り手の大学生が列車の中で遠足の小学生たちとアフリカ出身の労働者に出会う様子を描いたシルヴィア・バツレストラの「幼いジミヘンドリクスの恋人」、六八年の学生運動直前のナポリの高校生とギリシャ古典の老教師の交流を回想したエツリ・デ・ルーカの「板仕切り」、建築技師の祖父と孫の関係を描くマルコ・ロドリ「四〇、四一」が収められている。

出身地ローマを舞台にした社会の「落伍者」たちの奇妙な物語で知られるロドリだが、この作品では、国境の町トリエステの丘陵地(第一次大戦の激戦地となったカルソ台地)と海(造船場)を背景にして、孫と祖父の静かで強いつながりを物語る。スザンナ・タマーロの『心のおもむくままに』の祖母と孫娘の関係、あるいは映画『ニュー・シネマ・パラダイス』のトト少年と映画技師アルフレードのように、直接の親子ではない間接的な間柄が注目される傾向にあるようだ。

マルコ・ロドリ「四〇、四一」

今晚の空は、遠くに落ちる稲妻でいっぱいだ。家の庭の向こう、鍵を忘れた時に乗り越える鉄柵のずっと向こう、ジャコモ・レオパルディ通りと水路の先、たぶんドウイノとシステイアーナよりももっと遠くにちがいない。雷鳴ひとつ聞こえてこないから。たぶん稲妻が落ちていっているのはトリエステかその向こうのユーゴスラビアだ。あつちは水がすぐきれいだけれど、レストランでは何時間も待たされる。灰色に青ざめた遠くの空を引っかく電気の蹄を男の子は眺める。でも、この庭にあるシュロやしおれたバラの上にある空はまだ明るく、夜八時のオレンジの光が残っている。七月なかばの夜だ。台所のテラスに座り、両脚を柵の間からだらんとさせながら、こんなのはまるで見たことないや、と思う。音はしないのに、稲妻がいくつもたて続けに走り、突風ばかり起きていく。稲妻が空気を切り裂いた裂け目から風が吹き出されて、トリエステがユーゴスラビアから突っ走ってきたようだ。廊下ではずっと電話が鳴っているけれど、立ち上がったって返事をする気にはなれなかった。きっと病院からの電話で、おじいさんが死んだと言われるのがわかっていたから。

とても立派だった、マンフレデーおじいさんが建てる家は。出来上がった家もすてきだが、もっとすてきでわくわくするのは、その前、上半身裸やランニングシャツで働く人た

ちがたくさんいる家だ。頭に新聞紙で作った帽子をかぶり、ズボンには漆喰の染みだとか、休憩時間にゆっくりと頬張る大きなパニーノから垂れたオリブ油の染みがついている。そして、タイルやペンキ、カーテンやカーペット、絵が入る前に、家の中がどうなっているのかわかるのが面白い。ズボンやスカートの下がどんなふうなのか、砂浜で水着姿の人のお腹だとか手術の痕を見るように。でもおじいさんの家は、その下も左官職人のようにどこも筋肉だらけだ。おじいさんが孫を預ける作業員はいつも決まっている。昔、目に石灰が入ったせいで、片目がガラス玉だった。象が幼いラジャを乗せるように、その作業員は建築技師の孫を肩車する。セメントの階段を上がり、あちこちを見せてまわる。部屋の四角い穴だとか、遺跡に生えた草みたいに壁から突き出た電線だとか、空き地に面した窓の四角い穴、ガラスの入った窓や入っていない窓。新聞紙の帽子も作ってくれた。「ガゼッタ」紙や「ウニタ」紙のタイトルを正面にした帽子があつというまにできあがる。なめらかな壁をきれいに仕上げるには、鏝をどう動かせばいいか教えてくれる。油のしたたるおいしいパニーノもかじらせてくれる。その間、おじいさんは図面を確認し、ああしろこうしろと指図して、みんなそれを聞いていた。おじいさんは木製の尺を使って距離を測る。それを開いたり閉じたりする様子はどこか謎めいている。こうして家が出来上がったいく。ずっと見とれてしまうほど素晴らしい。

夕食前になると、いつも少年は近所のパールへおじいさんを呼びに行った。中庭にテーブルがあって、大人と年寄りがトランプをしている。毎晩、仕事帰りのおじいさんは三十分ほどそこに立ち寄る。上着を脱いで、ヴェスバの機械工をしている友人ルビーノとコンビを組み、スコーパーやトレセツテで他の組を負かす。みんなの前にはコツリオのワインがあり、言い争いをしてもふざけながら笑っていた。中庭は気持ちのいい場所で、周囲は籐で囲われ、頭上には葡萄の枝が陰を作っている。少年が来たときは、かならず最後の一勝負をする時間が残っていることになっていた。おじいさんが椅子に引っ掛けた上着からジェラート代を出してくれるので、少年は背後に陣取って、夏の暑さに溶けていくクリームをなめながら、スピードとクラブのエース、ノックする三に、さらにノックする二を眺めていた。ときどきおじいさんが、これであがりだと言う。たまに間違ったカードを出したルビーノに汚い言葉を言ったりするけれど、それも周りを笑わせるためで、本気で怒ってはいない。中庭ではなんでも遊びだから。手番がまわってきて、調子よく自分のカードを場に叩きつけるおじいさんが、四〇、四一、これであがりだ、と宣言する瞬間が少年はなにより好きだった。

たまの日曜日、おじいさんはガレージからフィアット一五〇〇 チンクエチェント を出して、第一次世界大戦の戦場

を孫に見せてまわる。曲がりくねったがたがた道をずっと上って行かなくてはならない。とても美しい風景だけど、ひとつの町に住むくらいたくさんのオーストリア人とイタリア人が死んだんだよ、とおじいさんは説明した。それまで顔を合わせたこともなければ、なぜそんな死に方をするのかさえ知らない人たちだった。じめじめした洞窟に潜り込んだ砲兵隊の大砲は、筒先を岩の合間からのぞかせて、敵の防衛線を休みなく攻撃した。もつと小さい砲には馬乗りになった。小さな記念館には、銃弾の穴が白く開いた濃い緑の軍服だとか半分焼け焦げて色褪せた旗がある。おじいさんは孫に、戦いと飢えの話をする。少年は自分が戦闘の最中において、唸る銃弾の音が聞こえるような、塹壕の冷たさがサンダルと編模様シャツにしみてくるような気がする。おじいさんは大詩人ウンガレッティを聞かせることもある。こんな詩だ。「飢えた狼となりノわたしはひきずり降ろすノ子羊のような自分の身体を」怖いけど素晴らしいと少年は思う。それから一五〇〇 チンクエチェント は、昼間の熱をため込んだ海へと降っていく。浜で暗くなつていく水を見ている人はだれもない。右手にモンファルコーネの造船場がある。あそこで造っている船は、世界中をめぐる、町を丸ごと運べるような船なんだ、とおじいさんは言う。そこで、孫は想像する。カールソで死んだたくさんの人たちがいまだこの船に乗って、青白い顔にサングラスをかけて黙ったまま太平洋へと長い航

海に出ていく様子を。そのあと、ふたりは暗い水のなかで泳ぐ。すぐに脚は海底に着かなくなるが、おじいさんの肩に手をかけるだけで、脚が草原に着いているみたいに少年は安心できた。

大部分の人間はマテ貝と同じだと、ある晩おじいさんが話をした。一方の穴から飲み込んで反対側の穴から吐き出すだけの連中だ。一生ずつとそればかり、穴に入れた物が向こうから出ていくのを眺めて、手元になんにも残らないと悩んでいる。食べて糞をする、この仕組みで生きているんだ。そういう人を馬鹿にするもんじゃない。生まれつきそうなのだから、世界を糞に変えているからといって嫌な顔をしてはいけない。それで幸せなこともよくあるんだ。孫はたずねた。ぼくらふたりもマテ貝なの、母さんやリーノや、ウンガレットイも同じように動いているの。おじいさんは海の前をみつめる。そこにある船はじつと動かないようだ。おじいさんが目を固く閉じると、顔に、工事現場の太陽で日焼けした赤い皺がたくさんできる。そうじゃない人生だつてある、と答えた。フルートみたいにあちこちに穴があつて、優しい音色を奏でるんだ。開けた空へ向かつて魂がそこから自由に逃げていく。穴がたくさん開きすぎている人もいる。どこでも無駄ばかりで、血といやな言葉を垂れ流す人も。

ある日、老人は仕事で計算間違いをするようになった。最初はちよつとした数字で、たいしたことではなく、測量士から咳ばらいで間違いを注意されると、あつけなく間違いを認めた。かたわらに孫を呼び、検算しておくれと言って笑つた。少年は数字が得意だつたし、忙しいおじいさんを手伝えてうれしかった。おじいさんはすぐに前の数字を修正した。その筆跡と万年筆は、戦争や降伏で調印する王様みたいだつた。ときどき、いきなり少年に向かつて、九かける七は、六かける四、五ひく五はいくつになる、とたずねた。すぐに答えてあげると、そうだそうだとおじいさんはつぶやきながら下を向き、六かける四は、ともう一度聞き返して数字を紙に書きつけ、しばらく考え込んでいた。ある日の午後、事務所の大きなテーブルで計画案を示していた。その前には、家族のために夏用の美しい別荘を希望しているお金持ちの客、そして孫もいた。図面はすべてきちんと整っていた。それぞれの部屋、壁、窓、それに庭の植木、鎖につながれた犬、草花、肩掛け鞆を抱えた郵便配達。おじいさんは計画を説明しながら赤と青の色鉛筆でさらに細部をつけ加えた。瓦、激しい雨、それに煙突から出る煙。しだいにその煙が、光沢のある薄い紙の上で拡がって、家もなにもかも覆い尽くしてしまつた。するとおじいさんは、引き出しから紙の束を取り出して、部屋中に赤と青の煙を吐き出し続けた。

上着のうえからシャツを着る。タバコに火をつけようと

マツチ箱に擦りつける。そんなことがますます増えた。ネクタイの代わりにベルトを首に巻いたりした。うっかりしてたんだと自分では言ったが、本当ではなかった。実際に、しばらくして本人も気がついた。おれは頭がいかれてきているんだ。工事現場がどこにあるのか、それがなんなのかも覚えていなかった。友人のトランプ遊びに参加させてもらえなくなった。でたらめにカードを出したり、四〇、四一、あがりだ、これでおれの勝ちだとむやみに叫ぶからだ。そこで隅のテーブルに座って、孫を相手にスナップ・ゲームをした。おれにとらせておくれ、目の前に札が少ないと悲しくなってくるから、と言う。それで孫は、カードを全部とらせてやり、夕食の時間になると家まで連れて帰った。ある日道の真ん中で、煉瓦を一杯に積んだ手押し車を押しているおじいさんに出会った。ひどく暑くて、影が足元に張りついていた。なにしているの、と少年がたずねた。家を家に運んでいるのさ。ぼくも手伝うよ。なに、そんなことはいらないって、おれは建築技師なんだ。ねえ、手伝うから、少しずつ交替で押そうよ。

その夜、少年は夢を見た。海の沖合で、おじいさんの肩にしがみついていた。老人の脚は百メートルもの長さがあり、海底まで届いていたが、魚たちに少しずつ囃られていた。頭から尻尾まで尖ったヒレばかりだった魚は、おじいさんの脚

を食べるにつれて肉付きがよくなって、海のなかへ消えていった。すると別の魚がやってくる。それから羽根付帽のアルプス山岳兵が鈴なりになった巨大な大西洋連絡船が来て、みんなは舷窓から手を振りながら、おじいさんにあいさつした。救命具を投げてくれ、もうだめだ、とおじいさんが言うところ、かれらは魚をもっと集めようとしてパン屑を投げた。さようなら、さようなら、マンフレディ士官殿、といっせいに叫んでいた。少年の口は、海の底の海水と涙で一杯になった。

わしもマテ貝なんだ、おじいさんはため息をつく。頭に入れた考えが尻から出ていく。そしてまた頭に返ってくる。ウンガレットの詩も尻から落ちていく。かれに申し訳ないと伝えておくれ、いや、なんにも言わないでくれ、そのほうがいい。

少年はおじいさんを教区教会の映画館によく連れて行くようになった。ふたつの作品が続けて上映される。騎士道物やチッチョ・イングラツシアとフランコ・フランキの笑い話がスクリーンに流れる。まわりの観客が笑うと老人も笑う。他人と同じであるため、自分が破滅した人間だと知られないようにするためだ。ポップコーンやらハツカヤカボチャの種を最初から最後まで食べ続けていて、映画のなかでだれかが泣すれば、もつと大声で泣き出す。

葬儀は朝七時に行われた。どんよりとした空は建物のすぐ上にある。親戚数人が黒っぽい服を着て集まっている。その黒いかたまりからひとりずつ離れては、ひとつかみの土を墓穴に投げ込む。向こう側に、パールの友人たちが帽子を手に立っている。トランプを一組、金貨札を空に向けて棺の上にまき散らしたらきれいなのに、と少年は思う。七時半に死者は埋葬された。葬儀人に支払いがされる。おかげさまで雨は降らなかつたね、とそのひとりが言う。赤と青のユニフォームを着た二十人のサッカー少年が、墓地の外の道を通りかかる。少年はかれらを見る。かれらも少年を見て、短パンの下の鞞丸に触る。

一年後、広場で一人のおばあさんが少年を呼び止める。おじいさんはどうしておられるの、とたずねる。しばらくおみかけしないけれど、鐘の音が正午を打ち、モンファルコーネの教会の軒蛇腹からハトが飛び立つ。元気ですと少年は答える。亡くなられたって聞いたけれど、とおばあさんは言う。違いますよ、言い間違いでしょう。口ごもり、顔が赤くなる。死ぬのは恥ずかしいことだともう分かっていた。いえいえ、亡くなったわ、と老女は言い張る。おかしなでたらめをしゃべっていたし、耳と鼻から血が流れていたもの。いえ、そうじゃありません。思い違いですよ、さようなら。

少年は足取りを速める。もうお昼だ、フルートの先生が待っている。

2 作家 レポーター

ジャーナリズム、ルポタージュなど、いわゆるノンフィクションが文体と想像力の質の高さによって文字として成立する例として、この章ではサンドロ・ヴェロネージの「アングラシアの魔術師」、エンリーコ・デアリオの「ジャコモ叔父」、サンドロ・オノーフリイの「南西部行き長距離バスで」の三作がある。医師出身のジャーナリストであるデアリオは、八六才の囚人ジャコモ・リイナの経歴をたどりながら事実の断片を収集し、イタリア社会の陰の面、思いがけないマフィアの姿を照らした。オノーフリイはアメリカ大陸中西部を走る長距離バスで、作家自身が遭遇した体験を取りあげている。

ヴェロネージは、八八年のデビュー作『この歓びの列車はどこへ向かう』から二〇〇〇年カンピエツコ賞の『過去の力』まで小説を発表する一方で、日常のささいな事件、現代風俗の現場に自ら実際に足を運んで取材した一種の「潜入ルポ」を続けている。二〇〇二年には、これまでの体験エッセイの集大成となる『超リスト』が発表されている。この短編では、道ばたで拾った宣伝ビラをきっかけに人生相談のため「魔術師」を訪問するヴェロネージの客観的な観察描写と内面のずれが笑いを

誘う。しかしイタリアにおける祈祷や黒魔術の「オカルト・占い」の過熱ぶりを考えると、笑ってはかりではいられない。あの調査によれば、こうした「魔術師」に対し支払われる金額はイタリア全体で年間六〇〇億円に達するという。作家は決して頭から否定的というわけではなく、デミータ訛り（カンパニーア州アヴェッリーノ出身の八〇年代の政治家）の魔術師見習いとの間には一瞬、友情が成立しかけるが、あくまでいたずらっぽい視線は変わらない。

サンドロ・ヴェロネージ「アンダルシアの魔術師」

ある朝僕は道を歩いていて、くしゃくしゃになった小さなピラを歩道で拾った。こう書いてあった。

アンダルシアの魔術師

現代でもっとも経験豊かな魔術師

話題沸騰中

占星術、テレパシー、護符術などで

数々の奇跡

くすぐりするな

どんな場合でも貴重なアドバイス

恋愛、財産、病気に關して

あなたを援助します

ピラの裏側には住所と電話番号のほか、色あせた白黒写真に中年男性が写っていた。軽い斜視でくいちがった暗い感じの目つき、白いシャツにネクタイ、ひどく襟の広いトレンチコートを着ている。とつておこうとポケットへつつこんだ。ピラはそのポケットから別のポケットへ、さらに新しいポケットに移り、札入れ、手帳、そして突然またポケットへと移動しながら、引越したのどんちゃん騒ぎだのコインランドリーをくぐり抜けて、姿を消すことなく、また何度目か手の中へ戻ってきた。ある日、僕はピラと縁を切るには、電話をかけて予約するしかないと決心した。当人のことをいきなり持ち出す気にはなれず、「もしもし、アンダルシアの魔術師をお願いします」と、友だちからその番号を教えてもらったと言つて、いま悩みがあるのだがとあいまいにほめかけた。向こうの声（魅力的な南部訛）は、すぐに今朝の面会を決めてくれた。そんなわけで、僕はいま騒々しい環状道路の脇に立っているのだが、目の前の呼び鈴のパネルには、アンダルシアの魔術師と書いてある表札は見あたらず、だれを呼んだものか見当がつかない。V教授というのがそれらしく、思い切つて押してみると運良く大当たりだった。とにかく、魔法の朝の滑り出しは上々だ。

出てきた男性がピラの写真と同一人物ではないことにはいきなりびっくりする。そんなに違っているわけではなく、同じように暗い目つきだし、植毛したようなまばらな頭髮もいっ

しよだが、斜視ではないし、結局のところ本人ではない。香の匂いが漂う内部は薄暗くて、事務所に通された僕は部屋の中央の祭壇につまずく。その上にはろうそく、仏像、偶像や三脚の足のついた火鉢など一式が揃えられている。壁にはたくさんの賞状や免状がべたべたと張ってあった。どれもそのV教授が、まったく違う団体から授与されたもの（なかには一九九二年の日付、つまり未来のものもある）だ。アンダルシアの魔術師は影も形もない。魔術の事務所も、ピザ屋みたいに、前の所有者から権利を買って運営が入れ替わるようになっていたのか。まさにそんな印象を受ける。人生にはもっと不思議なことが起こるものだ。

「さて、あなたのお悩みはなんでしょっつ？」V教授が尋ねる。

このときの僕の本当の悩みは、事態を甘く考えていて話を準備してこなかったことだ。それで、気がついてみたら、馬鹿げた陰気な身の上話をでっち上げていた。測量士としての自分の仕事、ロアーノでの観光用港の建築（いつたどこからロアーノを思いついたのか、たぶん、カミッロ・ズバルバ口が頭をよぎったのかも）、家から長く離れていたこと、ちょっと風変わりな女性との出会い、不倫というアバンチュール。港の仕事が終わり（早すぎて本当らしくないと自分でも思うが）、妻のもとへ戻って、その結果、変わり者の女性との関係は切れた。女性は納得せず手紙や脅迫で悩ませ

るが、僕はそんなに深刻には考えない。「ある種のことは信じない」からだ。ところが突然、その力が僕の身に襲いかかってくる。あつというまに測量士の職を失い、妻に家を追い出され、妻も家も失った。魔術師はいくぶん同情をこめて僕を見ていた。生年月日を訊かれたので本当の日付を伝える。「君は若い。若くて素直なようだね」とコメントされた。問題の女の名前は、と言われて「オルネツラ」と答える。妻の名前を訊かれて「エリザ」とでっち上げる。ぱつと考えて自分と関係のなさそうな名前を選んだ。ひょんなことから、関係のない人に迷惑をかけたくないからだ。それでも、オルネツラ、オルネツラという名はどこか聞いたことがあるような気がする……

そのあいだに魔術師はカードを並べ始める。敵対する男性敵対する女性、たくさんのスペード、死、火災、分かりはしないが、僕が見ても良くないようにみえる。実際、カードが現れるたびにV教授は眉をひそめて首をふる。軽率のカードが出る。「ほら！」と魔術師は叫ぶ。「軽率な行動だった」勇者マチステのようなカードが出る。それはライバルと呼ばれるカードで、魔術師の顔が曇る。「君の奥さんは、アントレーア……」「アレックスサンドロです」と訂正するが、このアントレーアと僕を間違えるのも二度目だ。「君の奥さんにはね、アレックスントロ、他に男がいる」と告げる。いい思いつきだ。僕はその場では思いつかなかった。「そっでしょっつ」と答え

る。「教習所で教官をしてるんです」V教授はまた首を横に振って次のカードをめくった。それはメランコリーで、海岸に少女が弱々しく横たわり、遠く水平線にカラベル帆船が見える。「でもまた君のことを愛しているんだ、そうだろう」と絵を指し示す。「船は君だ、君を待っているんだ」その話しぶりはきついデミータ訛で、tとd、pとbが逆転してしまい、なにを言っているのか聞き取るのに「苦労だ。知らせ、悪意」といったカードが続ぎ、すべてはこのカード次第だと言いながら最後にVがゆっくりと表にしたのは、展望台だ。「まあ悪くない」魔術師は言う。「悪くはない……」今度は本当に安心した様子だ。静かにしばらく考えていて、それから託宣を開始する。

「アレックスントロ」今度は偶然に言い当てた。「君は、否定的な波を受けている。このオルネツラ本人か、それともたれかが彼女のために君にぶつけどんだ。邪視と言っべきだね。君の知るかぎり、彼女は君の写真を持っている？」「もちろん」と僕は答える。「たくさん撮りました」魔術師はうなずいてため息をつく。「ほんどうに君はうつかりしないでいたんだ……今は君の周りにオーラを築かなくては」その助けとなるのが指輪をしたサトルヌスのような画像で、それが、「君をこの波から守ってくれ。もし私を信じでくれれば、四倍にしないでこのオルネツラに送り返すことだってできる。そうしなければとうなるかは彼女次第さ！」と急に興奮した。僕は

ようやく思い出していた。オルネツラというのは、二十年前にフィウメットの海辺で遊んだ友だちの妹だった。クラゲに刺された彼女のために、僕は監視員のところにアンモニア水をとりに行かされた。そのあいだ、断ち切られた葡萄の木みたいに彼女は泣き叫んでいた。V教授はずんぐりとして赤茶けた手を差し上げ、こつちをじっと見据えていた。指に黒い指輪が見え隠れする。「ごらん」と彼は言う。「私は催眠術師でもあるし超常診療士でもあるんだ。この手には二八〇の霊力がある。一八〇ではなく、アレックスントロ、二八〇の……」自慢げな目つきからするとかなりの量らしい。いったいどんな単位なのか知りたいたいところだが、「イエス・キリストからこの力を授かったのは、君のような人を助けるため、悪と戦うためだ。若くで素直な君が、そんな状況にいるのを見るのはつらいから」

今度は僕の手首を握って、君は興奮している、落ち着きなさい、と言う。でも僕はそうはいかない。自分がほんとうに最低の虫ケラだと思えてきて、すべてを打ち明けて謝りたくなったからだ。しかし彼のほうから、僕の遠慮をなくさせてくれる。「二百万かかるよ」と言っただけだ。「もちろん全部をいまずぐ払わなくてもいい。いま五十万、残りは作業しながらかまわない。君の場合なら、九日から九十日というところだが、それは君の運による」率直さがありがたい。僕は断りの言葉をつぶやいて、二百万は無理だ、いま仕事もな

いし、ただ相談だけするつもりだったと言う。Vは立ち上がる。「まあ、ひとつ例を見せであげよう」窓に歩み寄ってブラインドを下げる。「料金は要りません。相談料だけ払つてもらえば、最初の指導はおまけしであげよう」部屋が暗くなる。「オルネッラ、あんたの勝手だ」暗闇のなかで声が聞こえる。僕は断り続ける。今はけっこうです、また次の機会にでも、と言う。あの友だちの妹になにか不幸が起きるのかと思うと嫌だからだ。クラゲでもう充分苦しんだのだし、でもVは祭壇の上のろうそくに火を灯している。さっき僕が脚をぶつけた祭壇だ。「この前に座りなさい、ひるんではないけない」僕に命令する。「無料だと言つたら」僕は言われたとおり（ここで逆らわないほうがよさそうだ）、指し示された火鉢の前に座る。彼が精神を集中させ、円が描かれた紙切れを持ち上げるのが見える。「私の言葉を繰り返して」と言つて、いろんな言語の奇妙なこたませをもこもこ唱え出す。「オペラ・デイ。オペラ・トミニ。善の精霊と悪の精霊……」僕が繰り返していると、彼はろうそくから溶けた口吻を紙切れに垂らす。そして繰り返さなくていいと僕に合図をする、ひとりで唱え続ける。最後にその紙を見せてくれる。「なにが見える？」と尋ねた。「どつという意味ですか？」「口吻が描いている形だよ。測量士だと言つたね、これは何の図かな？」「ろうそくのかすかな灯りのなかで、飛び散つた口吻がごちゃごちゃ固まっているのをにらんでいると、長靴の形が

おぼろげに浮かんで見える。「イタリアでしょうか？」思い切つて言つた。「このところかイタリアなもんか！」とVは吐き捨てるように言う。「これは二本の脚だ、そうたら？」たしかに、ユーゴスラビア沿岸だと僕が思ったのは、かなり想像力をたくましくしての話だが、二本目の脚のようでもある。でも膝から先がない。「大きい脚が」と言つて彼はユーゴスラビアを指した。「愛情の脚だ。小さいのが仕事の脚。今ふたつの脚は縛られていて、君は自由に走れない。でもとうするか見でござらん……」別のろうそくから紙切れに火をつけると、それを僕の前にある火鉢に投げ込んで、今度はアフリカ風の言葉を口にする。マクンバ、カランバ……そして、小さな壺からなにやらつかみだして炎に振りかける。ぱちぱちはせる音がする。「聞こえるかい？ アレッサントロとエリザの名において魔法の粉を燃やしたんだ。ふだりがすぐにいっしょになれるように。今日は月曜日」と僕の顔をじつと見て言う。「君が水曜日」電話すれば、彼女が出るたらう。会いたいと言えば、彼女も承知するはずだ。彼女はまた君を愛している。君だちのあいたにあるこの波を、善の精霊の助けを借りて取り除かなければ」

このとき奇妙なことが起きる。それはまったく思いもかけなかった。魔術師が派手にゲップをしたのだ。あまり力強く朗々と鳴り渡つたので、これもまた魔術の文句の一部なのだろうかと思つたほどだ。そうではなかった。V教授は嫌そう

に顔をしかめて、両手を腹にあてて言う。「なんでこつだ。月曜日から始まるどは……」これにはほんとうに言葉がでない。この男の胃のなかで、宇宙の善と悪との戦いが何千年にもわたって続いていて、毎週初めに繰り返されるのだ、急にそんな想像が頭をよぎる。それなら土曜の夜にその中がいったいどうなるのか、考えたくもない。

一方魔術師は、まるでなにもなかったみたいにブラインドを巻き上げると、机の後ろへ戻った。「二百万は大金だ」と僕に言う。「それはそうた。どくに仕事をなくした君にとつては、ても、私にとつてどうたと思う？ 材料にお金がかかっているんだ。これを「らん」引き出しからアメリカンエクスプレス・ゴールドカードのような金びかの割り符を取り出す。「君が手に入れるこの護符は、永遠の効力をもつ君専用の純金製で、V教授のお手製なんだ」「でも、あなたがV教授ではないのですか？」と尋ねた。魔術師は吹き出す。「私がV教授たつて？ 冗談じゃない。私も君と同じてみじめなものさ、なんだと思つてるの？ 私の月給は百万だよ」嘲笑する。「いったい何を期待していだの？ 来て最初の相談で、すぐにV教授に会えるどても？ そこで彼が助けてくれるど？ 君はほんとうに素直たねえ、アントレーア」僕たちはいっしょに笑う。「彼はあちこち飛び回つていで、クレモナとパヴィアに事務所があるんだ。私は雇われたよ……」笑い転げている。

結局、僕はアンダルシアの魔術師どころか、山ほど免状を持ったV教授にも会わなかったわけだ。僕の相手が雇われの平魔術師で、その霊力が二八〇なら、ボスの霊力はいくらだろつ？ 五六〇？ 八四〇？ そしてまた僕は何度も自分が虫ケラのような気分になる。相談料の五万リラを払うとき（領収証が要るなら五万九千五百だよ、うちはきちんとしてるんだ）でもここで領収証をもらう気にはなれなかつた、それと戸口まで僕を送り出しながらまた二百万の話を持ち出したとき（よく考えてみなさい。でも、あんまり時間をかけないよつに。波が君を攻撃しているから）、そして、最後に戸口で僕を励ましながら、私も外に出ることにするよ、胃がちよつとむかむかするのでお茶を飲みたいんだ（怒り狂つた凶暴なサタンが腹のなかで吠えているのを僕は想像する）と彼が言うときだ。その瞬間、ほんとうに彼が兄弟のように思えて、すべて打ち明けることにする。しかもこれが最後のチャンスだ。もう踊り場まで来てしまった。「あの、僕は切り出した。「そのお茶をおごらせてください」「どんでもない、アレッサントロ」「でもちよつと言いたいことがあるんです」僕はつばやく。「つまり、あの、ええと……」 霊力を備えた手が上がり、暗がりに指輪がきらめく。磁力を帯びたその目がゆっくり閉じられる。「もうわかつた」魔術師は言う。「全部私は分かつているんだ」

3 他者

文化・心理・社会階層・生活習慣などさまざまなレベルで「異なる他者」との関係を扱った作品が五点挙げられている。ヴィンチェンツォ・チェラーミ「小さな凶暴な音」、ヴィンチェンツォ・パルディーニ「ボツダ」、ニコロ・アンマニーティ「動物学者」、エンリーコ・パランドリ「私と従兄」、サンドラ・ペトリニャーニ「ロシアの娘」。パルディーニは「ボツダ」と呼ばれるガマガエルを愛情の対象として描き出し、「パルプ系」を代表するアンマニーティは、ゾンビとなった学生が生物学の教授に出世するまでのホラー話をグロテスクかつコミカルな風刺を込めて物語る。パランドリは二重人格の意識の一人称で「自分の内の他者」を描く。ペトリニャーニは商用でモスクワを訪れたイタリア人女性と、ソ連崩壊後のロシアに生きる客室係の娘の感覚の違い、ふたりの間のコミュニケーションの不在に焦点を当てる。

国語教師時代のパゾリーニに影響を受けたチェラーミは、脚本、評論、小説などさまざまな領域に渡って多数の作品を発表している。その名前は、映画『ライフ・イズ・ビューティフル』を始めとする喜劇役者ロベルト・ベニーニとの共同脚本でも有名だ。この短編では、集合住宅の小市民たちが、深夜の正体不明の物音のために外国人恐怖に陥る様子が戯画化され、ドタバタぶりの中でそのヒステリックな攻撃性が暴かれる。

ヴィンチェンツォ・チェラーミ「小さな凶暴な音」

小さな物音はタンスの後ろから聞こえるらしかった。静かになるときもあるが、マウリツィオ氏が眠りかけるとすぐに再開する。起きて電気をつけるしかない。実際、マウリツィオはそうしてみた。タンスをのぞき込んだら、妙な音はぱたりとやんだ。変なものは見あたらない。ベッドにまたもぐり込んだが、そのまましばらく灯りをつけておいた。物音は完全に止まったようだ。灯りを消して横になり、眠りに落ちる準備をした。目を閉じたとたん、タンスはまた静かにすすり泣き始めた。自信をつけたみたいに、だんだん大きくなった。マウリツィオは飛び起きてまた部屋を明るくした。物音は、タンスのどこかに隠れるように停止した。そこで、考えたマウリツィオは、灯りを消すと耳をタンスにつけ、いつでも動けるよう身構えた。ところがなにも聞こえない。ただ夜の町を歩きかう車の音が聞こえてくるだけだ。哀れにもかかれは、家具の前で膝をついたまま眠りかけた。いつのまにかまぶたが下がっていたが、急な物音に驚いてびくっとした。奇妙ながやがや声のようだ。運良くそれは一瞬の振動だけで、すぐに以前の静けさに戻った。

どうやら、この小悪魔は光で止まるものではないらしい。マウリツィオはタンスの扉を開け、中の物を取り出し始めた。上着を一着ずつ、ポケット、胸ポケット、裏地の奥までさ

ぐつて、床に投げ出した。そんな音をたてそうな物は見つからなかった。とにかく、これでハエ一匹出てこなかったのだから、きつといなくなつたにちがいないとマウリツイオは思った。ベッドに戻り電気を消して目を閉じた。今度はぶつぶつ声というより、錆びついたざわめき、ゴロゴロと金属的な音がする。かつとなつてマウリツイオは思わず大声をあげた。不規則で、ずる賢くてしつこい物音に邪魔されまいと、耳に綿を詰めて、シャッターを降ろすように固く目を閉じた。しかし寝つけなかった。ちよつと変な不安が心の中で強くなつたからだ。聞こえなくてもその物音がまだ元気に動いているのはわかつていた。その存在が巢を出て部屋に入り、自分に飛びかかつてきて、脚をはいのぼるか、髪の毛を伝つて上から降りてくるかもしれないと思うと恐くなつた。耳栓を投げ捨て、もう一度灯りをつけて部屋を飛び出すと、その寝室に鍵をかけた。毛布を引きずつて居間へ行き、ソファで寝ることにした。

ここの物音は、脈動というより甲高いトレモロに近く、どこか柔らかな印象がある。かすかなさえずりのように響きわたり、壁から壁へ天上から床へと反射する。鳥か蛇みたいだ。マウリツイオは一瞬我を忘れて、あつというまに部屋中をひっくり返した。本を放り投げ、花瓶を叩き落とす。テレビを壊してソファをひっくり返すと、カーテンをゆさぶつてカーペットを巻き取つた。ところが今度は、物音は止まらな

かつた。家主が怒っていることを、まったく恐れていないようだ。

そのとき、玄関のドアを叩く音がした。マウリツイオは時計を見た。夜の三時近い。開けてみると、マンシヨンの住人が、五、六人立っていた。みなバジャマ姿で、髪の毛はぼさぼさ、眼を見開いてにらんでいる。一音にかれにくつてかかり、建物の全員の睡眠妨害になつているその音をどうにかしろ、と声を合わせた。マウリツイオは泣き出しそうになつて、みんなを家に招き入れた。非情な物音を捕まえようとしてひどい状態になつた家を見せた。全員で追いかけ始め、皿とガラスコップも割れてしまつた。音はそんなことにおかまいなく、今度は壁のなかを走り回つて喜んでるようだ。マウリツイオも含めて全員が部屋から出ると、ためらふことなく隣の部屋のドアを叩いた。そこにいたマンフレーデイ夫妻は、気が動転して震えていた。あらゆる場所に殺虫剤が撒かれてあつた。靴に植木に、冷蔵庫の中にまで。何時間も悩まされた夜の騒音の原因は殺虫剤のおかげで冷たい死体になつたはずだと、ふたりは得意げだつた。建物のなかで自分たちだけが犠牲者ではないとわかると、マンフレーデイ夫妻も仲間に加わつた。住人全員を巻き込んで、追跡が始まつた。みんなが階段を上つたり降りたり、踊り場で行き違つた。エレベーターは一瞬も止まるひまがない。みんな身をかがめて耳をすませ、配管、メーター類、排水管、飲料水タンク、ガス管の

扉を聞いてまわった。物音の場所を突きとめるため静かにしていなければならず、その音だけが、チクタク揺れる振り子のよつにひっそりと鳴り響いた。

気がつくくと、三階の扉のひとつが閉まったままだ。中でだれかがぐっすり眠っている。住人に大きな疑いの種を植えたのは門番のおばさんだった。その部屋には数日前から外国人が住んでいた。とても背が高く、痩せた風変わりな男で、陰鬱そうな眼窩には黒い影がある。いつも夜会服を着て、齒は齒磨き粉よりも真っ白だ。郵便はほとんど外国からで、こんにちはとさようならしか言わない。その日の晩、帰宅したかれが、妙な包み、ケーキかマロングラッセ、ディプロマティコのようなお菓子の包みを持っていたのを門番のおばさんは見ていた。だれとも会話をせず、人が泣いている時に微笑みそうな感じがあった。「悪魔なのよ！」ピンチの奥さんが叫んだ。オリーブの幹みたいにこつこつした無愛想な女性だ。重々しいざわめきが住人たちのあいだを走った。とうとうラ・ステツラ教授が進み出た。そのパジャマの前がはだけているのに気がついた奥さん連中はこそこそ笑っている。二階に住む若白髪のかれは、一度その外国人としゃべったことがあると言った。育ちのよさそうな芸術家肌の人らしい。「とにかくはつきりしているのは、その人は耳が聞こえないんだ」ラ・ステツラ教授が話しかけると、相手は両腕をあげて自分の耳を指さしてみせたという。門番は、信じようかせ

ずに首をふった。「聞こえないどころか、そいつはとんだくわせものよ！」その間、物音は、悠然とみんなの頭上を飛び続けていた。新しい住人を起こすことで意見が一致した。マンシヨンの騒動を解決するには、かれにその音を止めさせるしかない。呼び鈴にとびついてドアを叩き始めた。

三階の新しい住人は、毛布の下ですやすやと眠っていた。子供のように安らかな顔は、良い香りのする広い草原、小鳥たちのさえずり、川のせせらぎと柔らかにそよぐ風、そんな夢を見ているようだ。ドアの外では、二人がかりで木杵を殴ったり蹴ったりした。道路へ出て閉まった窓に石を投げる者、呼び出し音でたたき起こそうと電話にかかりつきりの者もいた。しかし気がつくどころか、新しい住人はなにもないかのように眠り続けた。翌朝、いつもの時間に規則正しく目を覚ました。シャワーを浴びて着替えをすませた。台所で読書しながらコーヒースをすすり、ビスケットを口にした。指慣らしのため三十分ほどピアノに向かった。そしてようやく家を出た。

かれがドアを開けると、パジャマとネグリジェ姿の男女の集団が、幽霊のように白く青ざめて黙って立ちつくしていた。なにも言えずにじつとかれをみつめている。手に靴を握りしめたり、あるいはハサミやスポンのベルト、布団叩きを持っている。男はしばらく見ていたが、振り返ってドアに鍵をかけた。住人が道を作ったあいだをゆっくりと進んでいった。

そのとき、地下室から水道屋が上がってきた。いまましい物音を捕まえようとしてビデの蛇口を引き抜いてしまった住人が、夜明けと同時に水道屋を呼んでいたのだ。

「これでもいいしょつぷ」若い水道屋は言った。「水道管が震えることはもうないですよ。ポンプのパッキンを交換しましたから！」みんな黙って耳をすませた。怪しい音はもうしない。顔に微笑みが戻り、あくびをしながら家に帰っていった。

4 少しふざけて

笑い好きのイタリアでは、テレビや舞台の喜劇役者が書いたコミック本がしばしばベストセラーとなる。この章には、社会諷刺と言葉遊びで若者に圧倒的人気を誇るステファノ・ベンニ、お茶の間に知られた「お笑い」役者であると同時に不条理な実験的言語遊戯でシュールな笑いを生む短編の書き手ジエネ・ニヨッキ、英米文学の教授であり七〇年代以来口語調の語りを追求するジャンニ・チェラーティのそれぞれ二作品が収録されているが、そのなかからベンニとチェラーティの作品をひとつずつ紹介しよう。

ベンニは、凶暴な肉食恐竜のラブストーリーというアンパランスな組み合わせからグロテスクなユーモアを引き出すが、そこには思春期特有のせつなさ、悲劇的なところが感じられる。チェラーティが語るハッピーエンドに固執した薬剤師の物語は、

地方に伝わる現代の伝説のように、現実とホラ話の間で不安定な宙吊りになっている。

ステファノ・ベンニ「レックスとティラ」

恋する若者はせつかちだ。岩だらけの谷間を大きく跳ねながらレックスは走っていた。奥にはティラの家がある。ふりかえると、自分の大きな足跡が遠くまで続いているのが見えた。けっこう歩いたな！ お前、どうして山の彼女を選んだんだ、と父親に訊かれたことがある。このあたりだって女の子はたくさんいるだろうに。でもティラには他の娘にはないなにかがあつた。ものを眺める目つきとが、目を細めるあのしぐさ。それに真っ白に輝く歯。そう、知り合った娘のなかでティラが一番すてきだった。彼女に会うためなら、いくら走ったってかまうもんか。それにレックスは遅いティラノザウルスだから、岩の砂漠ぐらいたいしたことはない。

水たまりのそばを通り過ぎた。突き出た腹と分厚い甲冑をした四人のトプスがいた。のんびり水浴びをしている。

「どいくんたい、大頭！」ひとりがかかった。

「見てみるよ」と別のやつ。「頭がでかすぎて、じつとしていると前に落ちちゃうんだよ」

「あんたはいかした寝取られ野郎だな」レックスは足をとめずに言った。

「ちょっと、うちの土地になんの用なのよ？」あこのとがった若い女のトプスが聞いてきた。その種族としてはまああの容姿だ。「ここ、肉食の連中は立入禁止だって知ってるの？」

レックスは返事をしなかった。挑発に乗らないほうがいいトリケラトプスの動きはのろいが、六、七人に囲まれるとけっこう危ない。たしかに、そこはかれらの土地なのだ。ティラの家へ続く坂道を急いで駆け上がる。山の崖にできた大きな洞窟の前に着いた。息を整えてから彼女を呼んだ。

「おい、おちびさん」

ティラはゆっくりと洞窟から出てきた。覚えていたよりずっときれいだっただ。水浴びを終えたところで、黒い肌が日の光に輝いている。にっこり微笑むと、すばらしい歯並びが覗いた。

「チャオ、レックス。じゃあ、上へ行きましようか？」

「約束したろ。クレーターのつぺんが待ってるよ」

「ぐずぐずしていられないわ。父さんは狩りに出てるけど、早く戻ってくるかもしれないし、帰ってくるというもいらいらしているの」

ふたりは岩を下へ蹴落としながら、横に並んで歩いた。

「あのね」ティラが言った。「父さんは自分が年だって認めながらもいないのよ。いまじゃ、あのブラドザウルスにだって逃げられちゃう。おとといなんかプロントをやっつけようとし

て、もうちょっとで命を落とすところだった。しつぽで叩かれた跡が顔にまだ残ってる。てぶらで帰ってきては母さんにやっあたりするの」

「うちの年寄りもすく怒るよ」レックスが言った。「でも、ありがたいことに、まだどうにか獲物は捕まえてる。昔の狩りの様子を話し出すと止まらないのには参るよ。あのころはほんと獲物があったって。飛んでる翼を捕まえた話なんか二十回も聞かされたっけ」

「年をとるって嫌ねえ」ティラはため息をついた。

「そっだね」と言いながら、レックスはちいさな前足を彼女の背に回そうとしたが、ティラは笑ってさつと先に逃げ出した。クレーターの斜面に着いた。地面は黒々として熱っぽい。ふたりのステゴザウルスが鉄のついた尾を打ち合ってトレーニングに励んでいるのに出会った。

「チャオ、ステープ。チャオ、グレッグ」ティラがあいさつした。

「やあ、かわいい子ちゃん」ステープが応えた。「クレーターへ上るのかい？」

「火傷しないよう気をつけな」グレッグがウインクして言った。

「あの連中のどこがいいのか、わかんないな」レックスはちょっといらいらして文句を言った。「ちびすけだぜ。一日中くちやくちやく口を動かしている。頭はちっちゃいし、肉は

硬くて小骨ばかり」

「ちゃんとしたいい子よ」ティラは言った。「まさかやきもち焼いているんじゃないでしょうね……」

ふたりはクレーターの側面を上りはじめた。それほど急な坂ではなかったが、体重で足元が崩れてしまう。レックスは鼻先でティラを後ろから押してやった。彼女はむっとしたそぶりをした。やっと頂上に到着した。空気が灰色で焼けるように熱い。

「ここに来るのは好きだけど、でもまだ怖いわ」ティラは言った。「おじいちゃんがよく言ってたけど、大きな石が空を飛んできてこの穴を開けたとき、仲間がたくさん死んだって」

「うちのおじいちゃんも同じこと言ってた」レックスは彼女に近づいた。「で、大切なことを教えてくれたんだ」「なにを？」かれにもたれかかったティラが言った。

「こう言ったんだ。いいかレックス、いつかもつと大きな石が空からこの谷に落ちてきて、山から湖まででつかいクレーターを作るだろう。大きな石が落ちた日のように、空は燃え上がるだろうって。その後、おじいちゃんがなんて教えてくれたと思う？」

「聞きたいわ」ティラはさえずるように言った。

「おれに言ったんだ。もし可愛い娘とふたりつきりになつて、キスしたくなったらためらうんじゃないぞ、いつ大きな

石が落ちてくるかもしれないからなつてさ」

「で、もし彼女が嫌がったら？」

「こう言ったんだ。彼女、もし今大きな石が落ちてきたら、かわいそつにキスがどんなものかずっと知らないままだよって」

「彼女が知らないなんてわかるもんですか」

黄色い光が空を照らし出した。にっこりしてレックスは指さした。「ほら、あれがしるしさ。このチャンスを逃すつもり？」

「それは嫌だわ」

すこし時間がかかった。ティラノザウルスがキスするのは簡単じゃないからだ。でもどうにか牙を整えて、ふたりが口を合わせたとき、大地が震え、熱風で地面から体が持ち上がる気がした。

「なんてすごいキスだ」砂が風に舞い散り、地面に亀裂が走る様子を見てかれは思った。

「ああレックス」キスをしながら彼女はため息をついた。やめたくてもやめられなかっただろう。ふたりはびつたりと絡み合っていた。こうして口と口を合わせて目を閉じていたから、大空で黄色い球体が大きくなっていくのを見なかった。走っていく無数の足音、轟音を立てて岩が割れる音が聞こえたけれど、なにが起きているかなんてふたりには気にならなかった。

若いときは、人生のすべてが目の前に広がっている。

ジャンニ・チェラーティ「ハッピーエンドに関する作家の意見」

薬局の息子は外国で研究していたが、父が亡くなると家に戻って家業の薬局を継いだ。こうしてマントヴァ県ヴィアダーナ近郊にある小さな村の薬剤師になった。

その博識ぶりは田舎で評判だった。巨大な書齋とか眼病治療の効き目、最新の灌漑法が話題になった。しかも薬剤師は十二カ国語を話すらしく、『神曲』をドイツ語に翻訳しているのだと噂された。

近所にチーズ工場の経営者がいた。高校生の娘の勉強を見てもらおうと、年配のこの研究者を雇うことにした。実際、この娘は活発なスポーツ好きで、学校の成績はかんばしくなく、しかも本が嫌い、ラテン語もイタリア語の固い文章も嫌いだった。薬剤師はお金が必要というわけではないが勉強好きだったので、その仕事を引き受けた。夏のあいだ毎日、スポーツ好きの少女のところへ通って授業をした。

そのうち、スポーツ少女は薬剤師に恋してしまった。スポーツをそつちのけにしてイタリア語やラテン語の詩に興味を持つようになり、長い手紙を書いた。

薬剤師がわざわざ買った自動車のことがいまでも話題にな

る。ふたりが田舎をドライブしていたとか、夜に家畜小屋でデートしていたとか。

夏の終わりに始まったふたりの恋愛が発覚したのは、次の冬のことだ。寄宿舎の尼僧が、少女が持っていた手紙の箱を取り上げ、両親のところへ送った。チーズ工場の持ち主は手紙の内容があまりにも不愉快だったので、薬剤師をひどい目に遭わせて、村から追い出してやるうと思っただ。

そのころ、少女の兄弟はファシスト行動隊に入っていた。かれらは、村の広場にある薬局を何度も襲撃し、主人をひどく棒で殴った。

それでも薬剤師が気にしたようには見えなかった。壊された薬局でしばらく客の応対をしていた。割れたガラス、倒れた棚、砕けた薬ビンもそのままだった。ある日店をたたむと、自宅の書齋に引きこもりめったに外出しなくなった。

かれが研究に没頭しているらしいことは村中が知っていた。ときどき、にこにこしながら広場を横切って、郵便局まで到着した新しい書籍を引き取りに行く姿が見かけられた。

その後、かれは病院に運び込まれ、そして療養所へ移された。そこに何年も入っていたので、覚えている人はいなくなつた。

療養所から帰ってきた老学者はひどく痩せほそっていた。また身の回りの世話を始めた老女は、薬剤師が食事をとろうとしないといみんなにこぼした。

食べるのを嫌がって、一日中本に囲まれていたがるの、と彼女は言った。ますます痩せていった男はほとんど外出しなくなり、村人の顔も見分けがつかなくなった。チーズ工場主は亡くなっていたが、その娘に何度か広場で出会っても気がつかなかった。だれにでも微笑みかけた。犬に向かって帽子をとってあいさつをしたという話もある。

手伝いの老女が死んでしまうと、自然とかれは食事をしなくなり、何週間も絶食が続いた。書齋で死んでいるのを発見されたときには、骸骨同然だった。羊皮紙みたいな皮膚だけが骨に張りついていて、ある本の最後の頁が開かれ、その上につぶした男は紙片を貼るところだった。

何年か過ぎて、その大きな書齋は遺産として孫娘に渡った。本をめぐっていった彼女は、生涯最後の日々を老学者がどのように過ごしたのか解った気がした。

この男にとって、短編も長編も叙事詩も、すべてはハッピーエンドでなければならなかった。悲劇的な結末に、物語が憂鬱や陰惨な終わり方をするに耐えられなかった。そこで何年も費やして、あらゆる言語の翻訳版も含めて数百冊の本の末尾を書き直した。書き換えた紙や紙片を該当個所に差し替えて結末を変更し、すべてをハッピーエンドに変えた。最後の日々のはとんどは、『ボヴァリー夫人』の第三部第八章の書き直しに充てられていた。エンマが死ぬ章だ。新しい版では、病気が完治してエンマは夫と仲直りする。

かれが指につまんでいた紙片が最後の作業だった。飢えて死にかけながら、あるロシア小説の仏訳の最終行にそれを貼るうとしていた。なかでも完璧な出来映えだったと言えるだろう。この場合、たった三つの単語を変えただけで、悲劇が見事な大団円に変わっていた。

5 心とその周辺

最後の第五章では、恋愛の破綻から運命的犯罪への軌跡を描写するルカ・ドニネツリの「三月はじめのある朝」、穏やかな憂いの漂う大人の恋愛模様を語るクラウディオ・ピエールサンの「大人の恋」、ワイン文化研究を通じて自己の再確認に至るピエール・ウィットリオ・トンデッリの「ワインの物語」、『星の王子様』のサン・テグジュペリの最後の飛行を再現したダニエーレ・デル・ジュディチエの「夜明けの二重の離陸」と、恋愛に限らずさまざまな感情表現を扱った短編が並んでいる。

このなかから八〇年代を代表する作家トンデッリの短編を取りあげよう。トンデッリのデビュー作『おれたちの自由を求めて』（一九八〇）は猥褻嫌疑で押収されるといふスキャンダルを引き起こしたが、むしろこの作家の特徴は、特定の詩学や理論にこだわらないポストモダンの折衷主義、あらゆる手法を取り込む変わり身の早さにあるとも言える。九一年に三六才で没するまで、創作活動のかたわら新人作家の発掘に力を注ぎ、次

世代の作家に大きな影響を残している。この「ワインの物語」では、ポローニャ大学の記号論の教授（『薔薇の名前』を発表する直前のウンベルト・エーコ）から論文を厳しく批判される大学生トンデッリの試問風景を挟んで、シンガーソングライターを通じてギリシャ古典詩人とワイン文化の発見した高校時代、そしてアメリカ文化への傾倒とヨーロッパ各地の放浪を経て故郷コレッジヨに立ち戻り自らの農民文化の「ルーツ」を再発見する現在が対置される。コスモポリタンでありながら、「巨大な田舎」イタリアの地方文化にも目を向ける作家は、一杯のワインのなかに、古代の饗宴詩人から現代のワインバーまで続く長い文化の系譜を読みとる。

ピエール・ヴィットリオ・トンデッリ「ワインの物語」

ほんのつい最近、高速道路から田園地帯を走る地方道へ曲がったとき、昔から親しんできた匂いを感じて、ぼくは思わず微笑みながらつぶやいた。「家に帰ってきたんだ」列車で帰ってきたときは、もっとはつきり感じられる。ホームに降りたとき、季節によっているいるな匂いがする。ワインとリンゴの匂いのする初冬のフルーティな霧だったり、刈り取られた牧草が八月の暑さで乾く匂いだったり、開花の匂い、あるいは畑に撒かれた肥料の匂いだ。そんな匂いを嗅ぐと、たちまち一年の特定の時期へと誘われる。町に住んでいた

他の大陸を旅行しているときには、そんなことは完全に忘れていた。

ところがこの前、そう、晴れているがまだ寒い三月のある午後早くのことだった。雪で覆われたアペニン山脈の波打つ連なりが見え、正面には柔らかな緑のマントのような田園風景が広がっていた。ブドウ畑や掘り返された畑が続いている。道はたで、洗ったピンをゆすぎ、水切り台に並べて乾かしている男女の農民の姿をあちこちで見かけて、このときぼくは思わずこつつぶやいた。「月が変わるころだな」

家に帰ると、両親とも忙しくて、あいさつどころか「元気が」とさえ言うてくれなかった。洗いたてのピンをもってワイン倉庫まで行ったり来たりしていた。うちの家は共同住宅の七階にあっただけで、人の動きは、狭い台所から踊り場、エレベーター、共同階段、ガレージ、そして倉庫の通路へと続いていた。面白かったのは、他の家の人たちも同じ作業をしていたことだ。狭い通路を照らしていたのは、タイマー式の集中照明のかすかな光ではなく、倉庫の狭い空間の外側に吊されたランプやトーチだった。桶やぼろ布、スポンジ、ピンが運ばれた。ぼくは旅行鞆を抱えたまま、子供のころ「地下室」と呼んでいた場所へ足を踏み入れると、奥に、かなり年配の男女の一団がいた。みんなジーンズに前掛けをつけ、関節症や持病にめげず床かがみ込んで、血行が不安定なのに

素早く階段を上り下りし、年のわりに力強くピンを運んでいる。仕事で着ている紺やグレーの三つ揃いや毛皮を脱ぎ捨てて、マニキュアや口紅もかまわずに、真剣そのもので、熱心に作業に励んでいた。個人的な楽しみとか、数ヶ月後に食卓に載るおいしいワインとか、すこしは苦勞して自分の手をかけたものをプレゼントできるといふ満足感だけがこの儀式に関係しているのではない。人々の生活の本質そのものが関わっているとぼくは思う。何年も前は、農場や農家の軒先のまったく違った状況で、この同じ儀式がなされていた。今はもういない人たち、そしてその思い出と関係している。だからこの作業をしているあいだは、かれらは会計士や測量士や医師ではなく、この土地の未裔なのだ。ちょうど列車から降りて匂いを嗅いだぼくが、一年に数日だけ野原からわき起るあの霧と蒸気から自分ができていることを痛感し、ぼくのルーツがほかでもないこの農民の世界にあると強く感じるのと同じように。

「明日は新月だ」エレベーターから降りてきた父は、正面玄関でぼくとすれ違いざまに言う。それがかれなりのあいさつだ。こつちはなにも言わない。なにかをぼくが待っていることに父は気がつく。命令するようにちらつとぼくを見て言う。「ちゃんとやってるか？ それじゃあ母さんの手伝いに行ってくれ」

数分後にはぼくもびかびか光るピンの長い列の前に、ゆす

いだり磨いたりしている。次の日には、父と車に乗って村の醸造所へ行き、大瓶を受け取る。ぼくなりにはささやかな貢献を見てはいるだけだ。排管、バットの浮き球、蛇口など、環境に優しい小道具が使われる。両親が子どものように見える。

家の狭苦しい地下物置の暗がり、歴史の重み、田舎にあった祖父の家の残像が感じられる。そんな残像はもうほとんど残っていないのだけれど。ふたりの頭のなかでは、ぼくの知らないトリップが起きているようだ。ぼくは村の広場で生まれ、映画館で育ったようなものだ。泡立つワインがピンに詰められるあいだ、少女時代の母親が目に見え、土曜フアシストの障害物競走で一等賞をとる姿が見える。穴のなかに母が仰向けになっていて、隣にその自転車と死体が転がっている。頭上を飛ぶ飛行機の機銃掃射。復活祭の日に、祖父が二十人くらい集めて宴会を開く。ぼくたち子供は別の部屋に追いやられているが、最後のときだけ両親の膝に乗ることを許された。あるときテーブルに出された瓶は、ワイン蔵に運ばれた普通のブドウの房からではなく、家の干し草置き場の柱廊で絞られたブドウから作ったものだった。こうして作られた絞汁からできるワインは、薄甘口で強く、濁っていた。ソムリエが上品な客に薦めることなどないだろうが、このワインには、ぼくたちにとって伝統だけではなく、「家」「大地」といった言葉と同じ意味があった。祖父は亡くなり、土地は

放置され、娘たちは村へ嫁いでしまった。今ではこのワインを味わうことはできない。

五〇年代半ばという、社会が農業から工業へと進化する決定的な局面に生まれたばかりと同世代の若者がここにいる。ロックとアメリカ神話に傾倒し、アングロサクソン文化と文学が好きで、都会神話を抱くひとりだ。今のほくはもう別人だが、この若者がどうやってこんな習慣や風景を思い出すようになったのか、これから話す物語の中心になる。つまり、けつして農民だったことはなく、むしろ農民文化と対立しながら成長した同世代のほとんどと同じようなこの個人が、先行世代の体験と生活を受け継がずにはいられないと感じるようになったのはなぜなのだろうか。それは、無意味な断絶のせいでわずか一世代で消えてしまった風習と儀式をせめて理解しようとするためだ。そう、それがこの物語の道筋だ。ここにはノスタルジーではなく、自分を理解したいという気持ちがある。周囲の人々と文化を調査し、語りたいたいという欲求だ。この文化にとって、ワインとは生活と想像力の巨大な貯蔵庫である。

コミュニケーション理論研究所がある建物一階の狭い控室に、記号論の教授が入ってきた。脱いだ紺色のロデン・コートには、みぞれがあちこちついている。リズムよく床を踏み鳴すと、凍りついた街路と暖まった室内の温度差で曇った眼

鏡を外した。髭をさすって、輝く真珠の飾りを拭って乾かした。がっしりとしたその姿は、肥満体とも言えそうだが、どこか不格好で親しみやすさもある。すでにヨーロッパとアメリカの主な大学に名の知られた教授であり、その学問的才能だけでなく、ユーモアのセンスと警句、奇抜で面白い議論をすることでも有名だった。

とにかく、十年前の十二月の午後早く、ポローニャでは雪が降っていた。自分が書いた試験レポートを教授と議論するために、かなり前から来ていた学生は、緊張して気持ちが昂ぶっていた。試験期間の一ヶ月前に、コースの同級生といっしょに小論文の原稿を助手に提出してあった。その助手がコースの原理・理論課程の講義の担当だった。クラスのほとんどはうまくいったが、かれは面倒なことになった。そのレポートが、コース独自のテーマとは違ってしまった別の研究であることについて助手はいい顔をしなかった。それで、教授がアメリカでの研究旅行から戻り次第、いっしょに話し合うようにと言われた。

十二月になって呼び出された。学生は心配と困惑の心境で、自分がしたことを個人的に弁護できる誇りと、教授（面倒で苛立った姿を思い浮かべた）に対して直接弁護しなければならぬ怖れで、内面の余裕は揺れていた。雪で濡れた論文を丸めて手に持ったまま、その狭い研究室控室で、まるで冬將軍のように相手が到着するのをじっと見ていた。

「こつちへ、なかへどうぞ」ようやく教授が研究室のドアを開けた。ロテン・コートをコート掛けにひっかけると、カバンを入り口左手の机に置いた。ドアが開いたとたんに学生は立ち上がった、聞こえないくらいの声であいさつをした。「さあ、座って」デスクの正面に座るように教授は促すと、丁寧にごう続けた。「ちょっと電話しなければ、二分だけ待ってもらえるかな」

若者はデスクの前の小さなソファに座った。座りにくいし、テーブルに比べて低すぎると思った。論文を用意してばらばらとめくり、何度か咳払いをすると、雪の積もった中庭を窓からしばらくながめた。相手はどこかの大学の事務と英語で話をし、受話器をいったん置くとすぐにまた別の番号にかけた。手帖を見る様子はまったくくない。その様子はビジネスマンのように素早く簡潔で、それほど儀礼にこだわっていない。やっと電話が終わって、教授の視線が学生の姿にとまった。それから、デスクの左側に積まれた論文と書類の束に向けられた。

問題の論文はいちばん上にあつた。教授は一言も口にせず手に取ると、ばらばらとめくり、すべてを急に思い出したかのように「ええ」とうなった。「文献にあるレイモンド・チャンドラーのこの本は知らないんだが、ど忘れしたかな」と言った。

学生はその本を持ってきていたので、教授にみせた。アメ

リカ人作家の生涯とその妻についての書簡やノート、逸話を集めた書物だ。愛猫タキ、ペンシルバニアのオランダ人コック、ハリウッドの脚本家としての不満な仕事、写真や短編が載っていた。チャンドラーについて十分ほど愛想よく語り合った。それでも学生は、きちんと整頓されて意外なことに本や書類が見あたらないその小さな研究室に自分が呼び出された目的が、四〇年代の人気作家について話をするためではないのはわかっていて、容赦のない質問、反論、攻撃に身構えていた。それが後になればなるほど、心のなかの不安が広がるのを感じた。それでも、あえて自分から最初に動こうともしなかつた。時々、指先で自分の学生証をいじるだけだ。

教授はそのいらだちがつきながら、「単純な殺人芸術」について話し続けた。先に手の内を明かしたのは学生の方だ。「ぼくの論文のどこがまずいですか？」「ちょっとした間を捉えて、一気にたずねた。」

教授は勝ち誇つたような顔をして学生を見た。肘掛けに手を置いて座りなおし、笑って言った。「そう、論文だ！ いったいこのテーマを選んだのはどつしてだね？ 興味深いのはもちろんだが、論証のしかたがすこし……なんというか奇妙なんだ。つまりきみの論文は科学的じゃなくて、かなり変わっている。言いたいことはわかる？」

学生は答えなかつた。

「ワイン文化。正しい、まさにその通りだ。知ってるよ

にわたしはアレックスサンドリア出身で、あそこはそういうことをよくわかっているんだ。少々疑問なのは、ワイン文化と文化一般をきみが結びつけたやりかただ。きみがきちんと指摘しているように、大昔から両者には関係がある。でも本当に研究するのなら、とことんまで突き詰めて、科学的にやらなくてはいけない。いくつか例をあげようか……」頁をめくっていき、探している箇所をみつけた。学生は汗をかきはじめた。

「ほら、ここだ。きみはギリシャとラテンの古典を検討している。アルカイオスの断章だ。『若いうちは、下界については考えず放っておくがよい。われらの運命がどうであろうと、いまは酒を飲むのがふさわしい』それからラテン語でホラーティウスを引用し、ワインと歌の類似を強調している。そして『今を楽しめ』などの祝宴詩のジャンルをとりあげる。すぐに中国人李白を挿入している。唐代の道教の詩人だ。引用がある。『われらは休むことなく百の水差しを飲み干し、ついに年来のあらゆる悩みから心が解放された気がした』それだけでなく、きみの言う『古代のコンテキスト』のなかですぐにベルシャの詩人オマル・ハイヤームを引き合いに出してくる。『ワインを飲め。心から芳醇と欠乏を引き出し、七二の傷の痛みを取り去ってくれ』そのほかにも引用を並べてから最初の結論を引き出し、こんな等式に達している。ワインとは苦痛への薬、ワインとははかない時間の癒し、ワイ

ンとは自我の逃避先、ワインとは、若さ、幸福、エロス、自由、日常生活からの乖離、さらには、ピートルズがまだ活動しているみたいに、『ワインとはレット・イット・ビー』だ。ほのめかしている。それから、ワインとは自然への埋没、自然の感覚、人生哲学、憂鬱、微笑み……エウリーピデースの『パツコスの信女』から二行引用したとたん、君の論文では、ワインが、神による靈感、神々との一体化、予知能力、聖的酩酊、聖的自由、抑圧的な規制の破壊と同一視されている。たしかに、どれも否定できない真実だ。つまりワインとその慣習、礼賛は、何千年のあいだに、こうした意味すべてを担ってきた。しかし研究論文では、すべてを一息で言うことはできないんだ。中国の作家を引用するなら中国語で引用しなくてはならない。どんな翻訳にも誤訳はつきものだからね。きみは中国語はできる？ このイタリア語翻訳とまったく同じことを李白が言ったと断言できるかい？ アラビア語は知ってる？ 古代ギリシャ語ができるのは間違いないが、アルカイオスをこう訳している。『ああ、パツカスよ、この生の倦怠は体によくあるまい。最良の薬はワインだ。酒を飲むのはわれわれのため』この『倦怠』とはどんな意味だろう。そのペトラルカ的遺産か、哲学用語なのか。アルカイオスの意図していたものが、現在この言葉で意図されるものだと言いつけるかい？ この言葉には、何世紀にもわたる意味や意義、哲学の批評解釈の文化が積み重なっているんだ」ここで

一瞬静止した。原稿から目を上げ、意見を求めるように一瞥した。

学生は机をじっとみつめて息を殺していた。自分の原稿をあちこちを指し示す教授の指を見た。すべてが踏みにじられたように感じた。こんな激しい批判には何ひとつ耐えられないだろう。方法論も、理論的アプローチも、カードとかメモといった研究資料だって。ローマ強奪のまっただなかにいるようだ。

まったく容赦がなかった。こんな攻撃は少しも予期していなかったが、弁解の余地はないことはわかっていた。方法論的には、教授の批判は論理的に完璧だった。これは国語の試験ではなく記号学の試験なのだ。つまり記号の世界を、その意味作用と内容、メッセージ、表現構造の関係性において研究する学問の試験だった。学生が試みたかったのは、ある意味論的世界をたどることだ。不可能な体系化を求めて、「ワイン文化」として恣意的にその世界を構築した。あらゆる時代と文化の詩人たちを読み、ワインについて書かれている詩を追いかけた。図書館を探しまわって研究をした。時間を浪費し、いったんは行き詰まりながらも、最後にはなにか出来る上がるだろうと思って続けた。その意図ははっきりしていた。新人研究者の文章によくある癖で、それは論文の冒頭に示されていた。「アルカイオスからボードレル、チャンドラーまで、ワイン文化の流れをたどり、文学作品にみられる文化

的なまとまりを求めて、意味素『ワイン』の構成要素を分析する試み」実際にワイン醸造の専門家が一瓶のワインを味覚という視点で分析し、色、ブーケ、アロマ、香り、濃度について評価するとしたら、学生は瓶そのものを時代を超えた絶対的イメージへと高めて、分解しながら、文学におけるその定義すべてを探ろうとした。醸造専門家やソムリエにとって、一本の瓶は人々や村、天と地について物語る貴重な対象であり、学生にとってはその同じ貴重な瓶が数々の書物と小説と詩を物語る。

研究に対するこだわりにはある種自伝的な面があり、自分の人生に関係していたので、向けられた批判に反論できなかった。書物とワインの研究をしながら、実は自分自身、そのルーツを探っていたのだということをわかっていなかった。あるいは、自分の読書を組織的に体系化したにすぎず、だからこそ、大学の試験はそれを表明するのにふさわしい場ではなかったということ。しかしまだ若すぎて己を充分知らなかった。この点についてなにも言わなかった教授はおそらくすべて理解していた。この若者のなかに感じられた、自分を定義したいという渴望をたぶん気に入っていたのだが、もちろん指導や指図はできなかった。真面目な研究者、言語とコミュニケーション科学の優秀な大学研究員にはなれないだろう。なぜなら、目の前にいる若者には、想像力を追いかけるから物語りたいという欲求があまりに強かったからだ。そこ

で話し合いの最後にこう言った。「これは優れた記事の題材だろつが、論文の題材ではない。わたしは『ブレイボーイ』の編集長じゃないんだ。けつして記号字に関わらないという条件つきで、きみに二九点をつけよう」

それから数年後わずか数ヶ月の差で、ぼくは一月に、教授は春に、それぞれ小説でデビューした。結果はまったく違っていた。ぼくは文学界の若き有望新人になった。かれは変幻自在の研究者から、広く翻訳されて読まれる世界で一番有名なイタリア人作家となった。

いまでも教授がデイスコやホールで当時の学生に出会うことがあると、姿を見つけてすぐに、「まず先生にあいさつしろよ！」と声をかける。十年前学生だったほうは、どきまぎしながら微笑んであいさつする。

「大学の研究にきみをひっぱらなくて、正解だったな」

「先生からもらった二九点は、ぼくの大学の成績で最低点でした」と言い返す学生は十年過ぎた今でも、試験に納得していない。

「それはだね」教授は得意げに言う。「ちよつとがっかりさせて、小説を書くようしむけたのさ。そのことでわたしに感謝すべきじゃないか」

「ここでぼくと学生には返す言葉がない」

ひらめいたのは高校の長机の上だった。「長机」と言うの

は理科室だったからだ。実験や実演、化学反応、教育スライド上映、そんな設備のある小さな教室兼実験室。他の教室と違い、ちよつとした解剖教室のように聴衆席が階段状に配置されていた。教室の奥の、壁一面を覆う大きなオリブグリーンの黒板の下に教師はいた。教師の机は白いタイル張り、その端には水や酸素、その他の気体を供給する栓が備えてある。理科室の教師は白衣を着ていた。ぼくたち男子学生は、当時はいつもジーンズにブルオーバーで、女の子は黒いエプロンをしていた。もう七〇年代に入り、たしか一九七二年だと思うが、田舎の小さな古い（創立二世紀の伝統を誇る）高校にも反抗の風が吹いていたけれど。

ぼくは教室の後ろ、最上段の長机にいた。仲良しの女の子から日記を渡された。「これを読んで感想を聞かせて」彼女はささやいた。机にくっついた顔は、組んだ腕で半分隠れていた。

日記を手にとつて読んだ。文章は詩のように書かれていた。四行が強調されて見えた。こう書いてあった。

また一日が過ぎていった。その調べは終わった。

どれほどの時が過ぎ去つたのか、それとも過ぎ去つていくのか……

中庭の太陽のなかで、その若き幻影が

あざ笑うシルヴィアたちを追いかける。

最後にまったく知らない名前が書いてある。フランチェスコ・グッチーニ。吟遊詩人だろうが、シャンソン歌手か詩人？ 古典作家？ いや、シンガーソングライターだった。その日の午後、彼女の家でぼくはレコードを聴いた。こうしてボローニャのシンガーソングライターの音楽がぼくの人生に登場した。

フランチェスコ・グッチーニは、大学まで、いやそれ以後も何年間にもわたって、レオナルド・コーエンの高い支持だけに支えられて、ぼくの不安定な田舎での過去のサウンドトラックとなった。その過去は、ボローニャへぼくを乗せて走る錆びついた列車と、空想のなかでアメリカ神話へと連れていってくれるお気に入りの作家たちのカリフォルニアのハイウェイとに分かれていた。しかしなんといつても大きな影響を受けたのは、グッチーニを通じて初めて真剣にギリシヤ語とラテン語に取り組んだことだ。グッチーニのバラード全曲を覚えながら、同時にアルカイオスとホラーティウスを翻訳した。ぼくと女友達は、無邪気にも歴史と文化の流れを転倒させてよく叫んだものだ。「これって、まるっきりグッチーニだ！」それでもかれの歌を通じて、先生からは教えてもらえなかったことを発見した。つまりグッチーニが二〇世紀の宴会詩人であるように、アルカイオスは紀元前六世紀の宴会詩人であり、ホラーティウスはサッフォーと並ぶ紀元前一世

紀の宴会詩人だったこと。ぼくがなにより好きになったのは、死語の再発見という考古学的な美しさに、若者にとつての「ボエジー」という単語の誕生そのものが結びついたからだ。優れた叙情詩からグッチーニは刺激と示唆を受け、そのテーマや状況や詩字をロックバラードの和音に投げ込んで追体験していた。古典語学、ギリシヤ・ラテン叙情詩の勉強は、ひどく退屈な文法にもかかわらず役に立った。つまり、そのおかげで現代詩と現在がより深く感じられたのだ。人類の重要な運命にとつては余計なことだろうが。

フランチェスコ・グッチーニの居酒屋やワイン、さかずき、タロット・カードは、こんなふうにして勉強の伴奏となった。古典の饗宴詩と現代の饗宴詩とのつながりがどんなに大きく、活気に満ちているかを実感した。アルカイオスやホラーティウスに思いを馳せるには、ギターを鳴らしてグッチーニの歌を歌わなくてはならない。ぼくらはギリシヤの断章に曲をつけて和音に収まるよう言葉を変え、サッフォーをまるでキヤロルキングみたいなギリシヤ語で口ずさんだ。そして、ホラーティウスが謳ったファレルノ・ワインは手に入らなかったが、グッチーニだったら、モデナのランブルスコを詩神ミューズに捧げることができる。アルコール度が強く、軽やかに透明なワインだ。

その後しばらくして大学の論文に行き着いたその研究は、こんなふうには高校時代に始まっていた。道のりはそれほど単

純でも平坦でもなかった。数年後には別の側面から取り組んだ。いろいろ問題が出てきて、長い間考えを重ねることが必要だった。それを語るためにもう一度理科室へ戻らなくてはならない。

ある日、いつもの授業でぼくらは教室へ入っていった。先生は片隅で、実験助手に手伝わせながら蒸留器やガラス製のラセン管、ボイラー、小型コンロ、容器、ピーカーをこまごまと組み上げていた。ぼくらは驚かなかった。調子のいい学生にとっては、ああよかった、今日は当てられずにすみそうだ、とそれくらいの意味しかなかった。

疑い深く席に着いた。教授は学生に向かって手を上げてあいさつしただけだ。顔を赤くして興奮していた。ぼくたち冒読者の集団に対して、物理と化学の世界の驚異を見せてやるというように。つまり、ふたりを見ているぼくたちは、実験が始まったとたん電気がとぶか、学校そのものが吹き飛ばんだといわんばかりに皮肉っぽい笑いを浮かべていた。教授はようやくテーブルの中央の席に腰掛けると口を開いた。

「今日は蒸留の過程を見せよう」誇らしげに言った。「ただ、これは法律で禁止されていると覚えておいてほしい。アルコールを作ることになる。知っているように、相応の許可がないとやってはいけないんだ」

その場の空気が突然興味と関心が変わった。蒸留過程のせいではなく、むしろあいまいだが小さな規則違反である何か

を目撃できるからだ。とにかく準備は整った。容器に入ったワインが沸騰している。実験助手が氷で濡れたパッドで包んでいるラセン管の中を蒸気を通る。同じ工程を二度通過してから、最後に小さなピーカーに滴り落ちるようになっていた。実験開始から十分後、悪臭が漂い始めた。三十分後にはぼくたちは居酒屋に、四十分後にはワイン蔵にいた。蒸気が発散して空気が重苦しくなった。助手はパッドを濡らし続けていたが、すぐにハンカチで口を、それからしばらくすると鼻も押さえた。その目に涙が浮かんでいる。教授は椅子に座ったままうなずいていた。まるで石ころから金が採れると自信満々の錬金術師のようだ。チューブとラセン管の先に置かれた小さなピーカーはなかなか溜まらなかった。一時間後、最初の一滴があった。歓声があがった。その歓声の的となった助手は力尽き、前列の机に倒れこんだ。完全に無色透明なその液体をみんな味わいたがった。もちろん、優雅な樽で熟成された家のなかのクリスタル瓶にうやうやしく保管された高価な蒸留酒とはまったく違っていた。結局ぼくたちは、この野蛮な蒸留酒を貴重な軟膏のエッセンスのように扱った。ひとりがその一滴を人差し指に垂らし、親指でつぶしてから、仲間へと渡した。その仲間は指の間で伸ばしてから匂いを嗅いで、次の仲間の指へこすりつけた。そのとき教室に入ってきた人は、互いに指を嗅ぎ合っている二人の若者が感動と疑いの混ざった大声で騒いでいるのを目撃しただろう。勝ち誇った

教授は特別席から物知り顔でながめながら、ようやく俗衆に科学の奇跡が明かされたと考えていた。

なぜこんなことを覚えているのだろう。ワインからアルコールへの変化、変質は、どう見ようとまず文化的な変質だ。これまで語ってきたワイン文化が一方にあり、また一方にはワインにアルコール分子だけを追求する文化、前者のネガティブな面である文化がある。初めはワイン文化だけが存在した。飲酒のネガティブな部分、飲み過ぎとか固執、完全な排除は、せいぜい憂鬱のなかに溶けこんでしまう。酒飲み、つまり少々ワインを大事にしすぎる人間は、生活とその苦惱をあまり考えないことだけを美酒ネクタルに求める憂鬱者だ。悲劇的な人生に背を向けようと、ワインによって解放されたいと願う。しかし後年起きたように、こうした欲望から、社会の落伍者の世界が別の世界、別の人生として形作られることはなかった。古代異教の文脈でも、キリスト教でもそれは同じだ。ブドウの木とその若枝についてのキリスト教の象徴学、最後の晩餐と日常の典礼においてワインが果たす役割について考えてみれば明らかだ。ワインは、仲間といっしょに過ごし、歌を歌ったり、友愛とエロスを祝福する手段であり続ける。それ自体が目的ではない。現実から切り離すのではなく、歓びや幸福、満足感、キリスト教徒なら永遠の救いも含めて、そうした瞬間を祝う最良の儀式となる。

しかし問題は半分しか解決しない。もしワインに苦痛の意

味がなかったとすれば、それは別の文脈、つまりアルコールの濫用へ形を変えて存在する。アルコール飲料がもつ多くの構成要素のひとつの評価としてではなく、絶対的価値としてのアルコールの追求は、いろいろな作家にみられる。たとえば、シャルル・ボードレー、フランシス・スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、ジャック・ケルアック、ノーマン・メイラー、チャールズ・ブコフスキー、カルロ・コッチョーリ、ルチャーノ・ピアンチャルデイ、ジョルジョ・シエルバネンコ、かれらの作品では、アルコールは、個人の消失、社会からの離脱にしかつながらない。ワインとアルコール濫用の間に、いつこんな断絶が、もちろん文化的に生じたのかぼくにはわからない。十年前には、それが中世初期に遡ると考えていた。つまり教会と国家の権力による公式文化に対置される下層文化として、ワイン文化が成立した時点だ。ファンタジーと想像の領域までも権力が支配しようとし、その領域の司祭であったワインを社会の周縁へ追いやった。当初はワインの飲用が、疲弊し苦しむ人たちの避難所として役立ったとすれば、この時からその濫用が完全なものになり、個人を社会的自己責任の外へ追い出してしまふ。こうして一種の孤立した「信心会」が成立し、権力の側にはそれを撲滅する動きが自然に生まれる。

中世のワイン文化は、まさにカウンター・カルチャーとなっている。その冒瀆的力の頂点は、喜劇や逆説、転倒した

王国のユートピアにみられる。ラブレの『ガルガンチュア物語』、ブルチの『モルガント』、オルテンシオ・ランドの『パルドクス』は優れた文学的成果だ。

現代の文化は、複数の理論を抱える性質上、寛容であり、もはや支配階層の鏡ではない。そこにはワインがもつすべての意義が記憶されている。だから、自然の産物をその価値すべてとして評価するか、それとも野獣と化して自己疎外の道に進むのかどうかは、個人の知的能力と感性、まさにその文化に任される。この意味では、コップ一杯のワインを前にして、今日どのようにそれを眺め、味わい、楽しむかによって、人生と生活全般の態度をかんたんに推量できる。ワインを評価し、そこにどれだけ歴史が含まれているかを知っていたなら、節度を持って飲み、品質にこだわって、おいしいワインをいつも宴と友情と平和のシンボルとできるだろう。

多くの研究はまだ終わっていないかった。最初の構成を考え、適切な区別をし、ワインの関連書を何冊か漠然と分析した。ときには化学からの視点、農業の視点、それから本来のワイン醸造学の面（一本のワインを描写しその属性を表す形容詞をめぐっては、記号学の本を一冊書けるだろう。「麦わら色」から「オレンジ色」、「琥珀色」、「金色」まで、色彩に関しては宝石の描写のようだ。「のびのびした」、「中性の」、「独

特の」といった匂いの言葉、「さわやかな辛口の」、「暖かい」、「フルボディの」、「軽い」、「軽やかな」、「柔らかな」、「渋みのある」、「舌を刺すような」、「ほどよく渋みの混じった」などの風味に関する言葉は貴族や名家の家系を話しているようだ……。しかし、すでに言ったように、それで研究は終わりではなかった。大学時代は終わった。悔やみはしなかった。やっと大人の生活に入っていけると思っていた。同時にポロニーヤ時代も終わり、居酒屋の時代が終わった。そこでは仲間といっしょにボトルを開け、ギターの演奏だとか、明け方まで粘る放浪学生グループの歌声がいつもある。ジャズやフォークのミニコンサート、カントリー楽団も終わった。そんな居酒屋で静かにおしゃべりをし、神経を潤しゆったりさせてくれる軽い白ワインを味わいながら演奏に耳を傾けるのは心地よかった。八〇年代になると、若者のあいだでビアホールがはやりだす。ワインについて、そしてその文化について物語ることは、儀式が執りおこなわれる場所について語ることもある。居酒屋やエノテカの意味について語ることものように変化し、発展あるいは消滅したかを語ることだ。田舎では客層の大部分が老人で、カードゲームをする客たちが減るにつれて、衰退していった。

七〇年代にぼくたちが通っていた古い居酒屋のほとんどは今もつない。田舎や都市周辺をくまなく探し、まるで宝探しのように、貴重な情報が入づてに伝えられた。たしかに、

そこで飲まれていたワインの質がとびきりよかったわけではない。でもしつこくねばってみると、ときには近所の農場で作られた有名銘柄のボトルに出会えた。でも大切なのは、いつしよに集まることだった。慣れない手つきでつがれたワインを前にして、新旧の世代が出会った。プリスコラヤスコーパのカードゲームのあとには、戦争やレジスタンスの思い出や、経済ブームの申し子であるぼくたちが見たことのない農村のイタリア、至るところ貧しかったイタリア、そんな話になった。どこかよその世界、他の銀河系からきた物語のようにぼくたちは話を聴いていた。

フランチェスコ・グッチーニやルーチョ・ダッラ、パオロ・コンテからフランチェスコ・デ・グレゴリー、クラウディオ・ロツリにアントネットロ・ヴェンディッティ、ファブリツィオ・デ・アンドレ、ルイージ・テンコ。かれらシンガーソングライターの音楽文化は、どれも居酒屋や小さな舞台で、仲間といつしよにギターとハーモニカ（ときにはふたつのコンガも加わって）で演奏できた。ロックブームが思い描く儀式と空間はまた別だった。ハイファイのアンブ装置とより強い飲み物、十人掛けの大テーブルではなく、ひとり掛けのストールとせいぜい二、三人掛けのミニテーブル。聴くことがすべてであり、音楽を聴くために会話はかき消されてしまつた。

居酒屋は古臭く感じられるようになり、ピデオバー、ビアホール、パブができた。そんな場所でも一応おいしいワインは飲めたが、そのために必要な時間のゆとりと気楽さは騒音に邪魔された。大半の居酒屋は閉店するか、価格を上げ、昔の農家の内装を投げ捨てて雑種的な店へと変化した。壁にはロックスターのポスター、がなり立てるテープレコーダー、ビールの蛇口、重たいジョッキ。ワインの種類は格段に少なくなつた。「ロックにふさわしいのはビアホール」、それが合い言葉だつた。

そのころぼくは、ヨーロッパ各地の若者のたまり場を頻繁に旅行するようになった。西ベルリン、ロンドン、アムステルダム、バルセロナ、パリの一部。イタリアの若者にとつてワインがはやらなくなつたとき、ベルリンの数百というクナイプ（文字通り「ビアホール」）で、ドイツの友だちは白いうそくに照らされたテーブルに座り、炎の光にゆらめく澄んだワインを飲んで夜を過ごしていた。音楽や文学、芸術、政治、とくに哲学の議論を交わし、ワインの儀式がいつも議論や比較対照、コミュニケーションに結びつくことが示されていた。ロンドンでは若い無名の芸術家でも、展覧会初日のヴェルニサージュにはワインがダースが供された。寄宿舎パーティーみたいな紙コップだが、すくなくともワインはまずまずだつた。ニューヨークのソーホーのギャラリーでも、展覧会の開催を祝つ土曜の午後には同様の光景が見られた。イ

タリア・ワインを見かけることもよくあった。カナダのフランス語圏にあるケベックでは、昨年冬にイタリアの新酒が爆発的な人気となり、称号つきが一番有名なボジョレーヌーヴォーを輸入量で上回った。イタリアではどうだろうか。

競争相手の反動を非難した後で、エノテカが登場した。本当のことを言えば、かならずおいしいワインが落ち着いて味わえて、それにふさわしい食べ物と料理が出される、この場所はい前からあった。でもここ数年そうした店が増えているのは、なんでもいいという選択ではなく品質と独自性を重視する新しい消費傾向の徴候だ。仲間とワインを飲む場所ではなく、みんなで最上のワインを飲む場所が求められている。おそらくここには、微妙だが大きなニュアンスをもつ違いがある。エノテカはワインの聖地のように建設される。ある晩ぼくは実際に体験したが、オーナーやボーイがワインの品質について何時間も語り続けることもある。自分たちがした旅行、訪れたワイン業者、畑と土地、それにまつわる物語を聞かせてくれる。そんな話に聞き惚れながら、客は細かな配りの成果を味わう。

ずっと言われ続けてきたように、イタリアは巨大な田舎だ。高速道路から降りれば、変わらない風景と習慣に出会える。産業革命が何度起きても、こうした伝統はおそらく変わらないだろう。伝統は人々のなかに根を降ろして、農民文化の生活技術にあるからだ。最近のぼくのうれしい発見はサレ

ントとか、たとえばフリウリの田園だ。そこにはいつもワインが関係している。肉感的でエロティック、狡猾なブリア・ワインや、力強い生気にあふれ男性的な甘さをもつコッリオの傾斜地のワイン。トスカーナを旅すれば、いまでもピエロ・デッラ・フランチェスカ的な景色を目にする。ピエモンテでランゲと低くすんぐりしたブドウ畑を横切る（どの村にも独自のワイン博物館があり、民衆と大地が属する一般的な意味での文化と、ワイン文化との深い繋がりが裏付いている）。シチリアを横断したり、あるいはローマの田舎で、氷で冷やされて曇ったカラファに入ったフラスカ・ティヤコッリのワインで午後の眠気に身を任せる。「オンブラ」を飲みながら、ターナーの絵のようなジュデッカ島を背景に、夕暮れ時のザツテレで最後の陽光を味わう。臓物料理といっしょにリグーリアのガーヴィのかすかな酸味を感じたり、マルケのワインや、ぼくにってはいつまでも兵役の味であるオルヴィエト・ワインを飲む。冬にロンバルディア地方の低地で、アルコール度の高い泡立つバルベラ・ワインのなかに霧を溶かして飲む。そんなとき、ぼくたちの国の偉大な古代からの豊かさをワインが表現していると実感する。そしてワインを奥深い文明と文化の事実として感じとる。

こうして出発点にもどってくる。この文学旅行にはたくさんの実感、体験、思い出、友人たちの面影があるが、それが始まった場所、つまりエミリアの土地へとかならず戻ってくる

る。より広大な西洋文明の申し子であり、ポップとロック音楽の頑固な愛好者であり、アメリカ映画とヒート・ジエネレーション文学を好んでいるにもかかわらず、自分は心底エミリア人なんだと自覚するには時間がかかった。この意味で、故郷の人たち独特のかたち、寛大なのかもしれない、活発で不安に駆られた憂鬱なかたちで、ぼくは出身地に結びついていて、それぞれの時代でワインが文学作品にもたらした意味を研究し始めた頃、現実のぼくは田舎暮らしの狭苦しさから逃れる道を探していた。作者を探している人格に結びつけるべき別の内容を探していた。十年が過ぎて旅を重ね、ほかの大陸と伝統を知った今、家族が来年飲むワインを瓶詰めする両親をぼくは見ている。その姿を横からうかがっていると、もしかれらがいなくなったら、いろいろな書物と文学を読んできたけれど、自分には同じことはできないだろうという思いが強くなる。ぼくは月を見て瓶詰めがわからない、醸造所に行って農民とワイン樽の取引量もできないだろう。それでもまだ、おいしいワインを楽しむことはできる。ぼくがワインの栓を開けるときには、すぐに、祖父や父、それ以前の大勢の人が生活のなかでまったく同じやり方でおこなった同じしぐさをその行為に重ねることだろう。

我が家のワインの瓶詰め作業は、数日かけて行われた。一仕事終わって、父は地下室の棚にラベルを貼る。いちばん上はぼくがひきつける。夜の食卓での会話はとぎれとぎれで、

急にぼんやりと中断して沈黙が訪れる。テレビ中毒のイタリヤ人家族によくあるものだ。コマーシャルになると、会話がすこしだけはずむ。席を立ち、コップを満たし、サラダをおかわりする。しばらくすると青白いテレビの光のなかに両親を残して、ぼくは自分の部屋へひきあげる。本を手にとつてベッドに身を投げ出し、友だちからの電話を待つ。大通り沿いに停めたぼくの車に気がついて、田舎をドライブしないかと誘いに来るだろう。どこか新しい飲み屋、「トレンディ」なデイスコ、超高級なエノテカ、知り合いの家とかに。

ここ数週間、レッジヨのシルヴィオ・ダルツォ、モデナのアントニオ・デルフィーニなどの郷土の作家を読んでいる。若いときには田舎者として敬遠していたのに、今ではこの土地と人々の移り変わりを理解しようとして読みふけている。これらの作品は、ぼくの部屋のバルコニーから目にするものと比較できる。ちょうど現実のカドーレがブツツァーティの作品にあり、ランゲの風景の特徴がバヴェーゼのなかにあるように。何世紀も地主だった家系の末裔であるアントニオ・デルフィーニの一冊を選ぶ。三〇年代、裕福で知的であり、体格のいい皮肉屋の青年だったかれは、田舎者らしく悪ふざけや仲間との夜遊びが好きだった。当時のモデナでかれが住んでいたのは、カナル・グランデの脇に建てられた巨大な建物で、大広間がいくつも並んでいた。毎晩のように劇場に足を運び、友人との食事やカフェ通いをした。その帰り

道、赤い広間、空色の広間、風景の広間、といった部屋を散歩して、ピアノを弾いたり、ジャコモ・レオバルディの『瞑想録』を読んだりした。そこでぼくはデルフィーニの二の節を讀む。

その晩、いつものことだが、僕は一瓶のランブルスコで乾きをいやした。とても軽く、スミレの香りがし、ランブルスコとして当時すでに貴重品だったが、今ではフィロキセラの伝染で姿を消してしまつた。

きつちり着込んだスモークキングに、ろうそくの灯火、水晶のグラスに入つた真つ赤な泡立つワインを手に、若者は自分の年齢、文学の計画、おそらく自分が愛することのない女たちに思いをはせる。「舞台の袖、舞台脇の特別席、控えめな灯りの下での孤独な夕食」からなる夜のモデナの中心街をぼくは思い浮かべる。二六歳のデルフィーニが夜会服を着て、建物の背の高い窓にちらつと姿をのぞかせるのが見える。みごとに洗練されたダンディーだ。貴重なランブルスコを飲まないかと誘っているのだろう。ぼくの想像では、それを一杯のシャンパンへ変えることはできなかった。ここでもまたワインを文学に、ワインをぼくたちの文化に結んでいるつながりの深さと感動が感じられる。今夜、友人とどこへおしゃべりをしに行くのか、ぼくはもう知っている。

終わりに

短編ひとつで作家を判断するのは難しいというより無謀だろう。しかしいくつかの窓を通して外の風景を眺めるように、複数の作品を並べることで、イタリア文学の現況を立体的に捉えることが可能になる。こうしたアンソロジーは、代表的作家の代表的作品を集めたり、なんらかのトレンドを生み出すのではなく、流動的な文学状況に占める作家の一时的な位置関係を伝えている。

冒頭の解説のなかで、ラ・ポルタは、これらの作家たちを同一の運動や詩学に結びつけることはできないとしながら、八〇年代に始まる「新しいイタリア文学」にこれまで指摘されてきたテーマ、表現上の特徴が、ここで採られた作品にも見られると指摘する。冒険的要素の不在、家族や個人の優先、強烈な感情の欠如、既存の文学様式やモティーフの再利用、悲劇的衝突を避けるための物語による演技などである。これらは一見したところ「否定的な」条件にも思われるが、優れた短編の場合、発想と想像力によって転倒され、皮肉めいた、あるいは無邪気な作品へと昇華されているとラ・ポルタは主張する。

こうした主張が、選ばれた作品のなかにどれだけ反映しているかは、読者の判断に任せられる。必ずしも編者の解説に沿った印象を受けるとは限らないはずだ。むしろ、読者が自分好みの作家を発見し、自分なりに「再編」していく行為を誘発する

のがアンソロジーの特徴のひとつだと言えるかもしれない。現代の短編小説という不安定な対象であれば、なおさらその傾向が強まるだろう。

注釈

- 1 Enzo Siciliano (a cura di), *Racconti italiani del Novecento*, Mondadori, Milano 2001.
- 2 Gianfranco Contini (a cura di), *Italia magica*, Einaudi, Torino 1988. オリジナルのフランス語版は一九四六年。
- 3 *Il semplice; Almanacco delle prose*, N. 1-N. 6, Feltrinelli, Milano 1995-7, Gianni Celati (a cura di), *Narratori delle riserve*, Feltrinelli, Milano 1992. *Italiana: Antologia dei nuovi narratori*, Mondadori, Milano 1991.
- 4 Daniele Brolli (a cura di), *Gioventù cannibale: La prima antologia italiana dell'orrore estremo*, Einaudi, Torino 1996.
- 5 Filippo La Porta (a cura di), *Racconti italiani d'oggi da Celati alla Baltestra*, Einaudi Scutola, Milano 1998. 111頁以下に『*Il grande racconto*』の解説。Marco Lodoli, *Quaranta, quarantuno*, in *Grande racconto*, Bompiani, Milano 1989; Sandro Veronesi, *Il mago andaluso*, in *Cronache italiane*, Mondadori, Milano 1992; Vincenzo Cerami, *Il rumorino crudele*, in *La gente*, Einaudi, Torino 1993; Stefano

Benni, *Rex e Tyra*, in *L'ultima lacrima*, Feltrinelli, Milano 1994; Gianni Celati, *Idee di un narratore sul lieto fine*, in *I narratori delle pianure*, Feltrinelli, Milano 1986; Pier Vittorio Tondelli, *Un racconto sul vino*, in Fulvio Panzeri, (a cura di), *L'abbandono*, Bompiani Milano 1993.

9 Filippo La Porta, *La Nuova Narrativa italiana: Travestimenti e stili di fine secolo*, Bollati Boringhieri, Milano 1995. 増補版は一九九五年。

7 Sandro Veronesi, *Per dove parte questo treno allegro*, Edizioni Theoria, Roma-Napoli 1988. 『116の軌心の列車はツリノ向かい』。岡本太郎訳、東京書籍、一九九三。

8 内田洋子・シルヴィオ・ピエールサンティ 『三面記事で読むイタリヤ』。光文社新書、二〇〇一。三二頁参照。